

堅信準備会 参考資料 イエスの教えてくれた祈り 「主の祈り」を現代的視点から

カルロ・マリア・マルティーニ著 篠崎榮・レナト・フィリピーニ共訳 教友社 2013 年

著者 カルロ・マリア・マルティーニ枢機卿について(1927～2012 年)

世界屈指の新約聖書の学者。ミラノ大司教在任中、多くの人々を神のみことばである聖書に導くために「みことばの学校」と呼ばれる一連の聖書講座を教区内で開き、神のみことばに耳を傾けながらそれを黙想し、それを実際の生活に生かしていこうという「レクチオ・ディヴィナ」を浸透させるべく大いに努めた。またキリスト教の信仰を持たない人々との対話にも力を入れ、真理を追求するすべての人々との出会いを定期的に持った。枢機卿時代、教会改革の旗手、リベラル派の代表であった。2005 年の故ヨハネ・パウロ 2 世の後継者選挙では、有力な候補者として取りざたされた。死の直前のインタビューで、枢機卿は「教会は 200 年ほども時代から取り残された。官僚組織が肥大化し、儀式と服装ばかりが仰々しい」とバチカンを厳しく批判していた。

主の祈りは、福音全体をまとめている祈りで、イエスの生涯すべてを総合したものです。また、聖書の祈りが「父よ」という叫びで始まるのは、他にないことです。イエスは、叫ぶ気持ちもこめて私たちに「主の祈り」を教えてくれました。イエスと父なる神様との関わりを知ることで、私たちも神様との交わりを深めることができます。わたしたちの信仰の基礎ともいえる“主の祈り”を学び、自分の生き方に反映させましょう。

まずゆっくりと、心をこめて“主の祈り”を唱えましょう。どの言葉に、どんな思いをこめるでしょうか？

主の祈りは、呼びかけと7つの祈願によってできています。

(呼びかけ) 天におられるわたしたちの父よ (7つの祈願～ように ～下さい) ①み名が聖とされますように ②み国がきますように ③み心が天に行われるとおり 地でも行われますように ④わたしたちの日ごとの糧を今日もお与えください ⑤わたしたちの罪をおゆるし下さい わたしたちも人をゆるします ⑥わたしたちを誘惑に陥らせず ⑦悪からお救い下さい

第1章. わたしたちの父よ

また、あなたがたが祈るときは、異邦人のようにくどくどと述べてはならない。異邦人は、言葉数が多いければ、聞き入れられると思い込んでいる。 彼らのまねをしてはならない。あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。 だから、こう祈りなさい。『天におられるわたしたちの父よ、／御名が崇められますように。 (マタイ 6 : 7～9)

一同がゲツセマネという所に来ると、イエスは弟子たちに、「わたしが祈っている間、ここに座っていなさい」と言われた。そして、ペトロ、ヤコブ、ヨハネを伴われたが、イエスはひどく恐れてもだえ始め、彼らに言われた。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、目を覚ましていなさい。」少し進んで行って地面にひれ伏し、できることなら、この苦しみの時が自分から過ぎ去るようにと祈り、こう言われた。「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように。」（マルコ 14：32～36）

イエスの教えた「主の祈り」を理解するためには、イエス自身の父との豊かな体験、おん父への信頼の心に深く入る必要があります。主の祈りを理解するには、頭ではなく、実際に祈る（どのように心が反応するか?をよくみること）ことが大切です。

「天におられる わたしたちの父よ」

イエスの「父」の経験

イエスが神について語るときは、ほとんど「父よ」と呼びかけています。

「私が父の家にいないかならないことを、ご存じなかったのですか」（ルカ 2：49）

生涯の終わりににおいても「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります」「父よ、彼らをお赦し下さい・・・」「父よ、わたしの霊をあなたに委ねます」（ルカ 23：34、46）

父と言う呼称は、初めてイエスによって使われました。当時のアラム語で「お父さん、パパ」と親しみをこめて呼ぶ習慣にならっています。「アッバ」はとても優しい呼称。イエスのおん父への根本的な信頼の表れです。私たちにも、「父よ」と呼びかけるように教えています。

「天におられる」という表現は、目を「天」に上げながら祈ったイエスのように、私たちも視線を「天」に向けてるように促します。私たちの父は、どこにおられるかまったくわからない方ではありません。「天」という、父がおられる場所に向かって祈りを捧げます。

「天」は、信仰の旅の始まりと目的地です。「天」は神様の素晴らしさ（善）であふれています。また、イエス自身の誕生、十字架、復活、昇天のように、わたしたちも「天の父へ」と帰還していきます。

キリスト者の「父」の経験

キリスト者の「父」の経験は、人間的なものではなく聖霊によって私たちに与えられます。

「あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは、「アッバ、父よ」と呼ぶのです。この霊こそは、わたしたちが神の子供であることを、わたしたちの霊と一緒に証ししてくださいます。」（ローマ 8：15～16）

「あなたがたが子であることは、神が、「アッバ、父よ」と叫ぶ御子の霊を、わたしたちの心に送ってくだ

さった事実から分かります。」(ガラテヤ4:6)

「わたしたちの父よ」(主の祈り)の言葉は、わたしたちが神の子どもたちであることと、セットになっています。「父よ」と唱えるたびに、「私の子よ、私の子どもたちよ」という神からの呼びかけを聴くようになります。

「父よ」と熱心に呼びかけるときに、私たちのうちに湧き上がる気持ちがあります。①親しみをこめて素直に話せる気持ち。②神は私がもっとも必要としているものをご存知だ、という安心感。③神の目から自分は大切なのだ、という深い自己肯定感。④試練のときに支えられ、付き添われている気持ち。

「父よ」と言う呼びかけはそれほど重要なので、主の祈りの最初におかれています。

一方、このような心から発する祈りはイエスの父への思いと対立しています。①ひたすら言葉を並べれば願いがかなえられるとうぬぼれている。②確信がなく唱えている。③神様に明け渡していない祈り。

エクササイズ (祈りを深め定着できるようにエクササイズを繰り返してください)

1. 祈りの時間に、散歩のとき、家事をしながら・・・ちょっとした時間に「天におられる」「天におられる」・・・と、この言葉だけを何度も唱えてみてください。どのような気持ちがわきあがりますか？ あなたの一日を「天」に向けてみましょう。

2. 「わたしたちの父よ」「わたしたちの父よ」と唱えたら、共同体として何かをしていく感情が湧いてきますか？

3. 「わたしたちの父よ」「わたしたちの父よ」・・・どのような神様のイメージが沸いてきますか？ 「自分も神様の子どもなんだ」という気持ちが沸いてきますか？

第2章. わたしたちを悪からお救いください

シモーヌ・ヴェイユの主の祈りの解釈から入ります。彼女は、1943年に若くして亡くなったユダヤ人の偉大な宗教思想家です。「この祈りには考えられるすべての豊かさが含まれています。この祈りのすべての言葉に集中しながら一度だけでも唱えるならば、必ず何らかの現実的な変化が起きます。それがごく小さなものであっても魂のうちに変化が産み出されます。(『神を待ち望む』ミラノ 1972年、194P)

わたしたちは「主の祈り」にでてくる「悪」という言葉に集中します。わたしたちの魂に起こる変化を望んでそうします。主の祈りが「わたしたちの父よ」という親しみのある呼び名で始まりながら「悪」という言葉で締めくくられることに意表を突かれます。シモーヌ・ヴェイユはこう説明しています。『父よ』で始まり『悪』で締めくくられるのは、信頼と恐れの関係を見つめるためです。わたしたちが恐れによって失敗が引き起こさないために、信頼だけが力を与えることを認識する必要があるからです」

終わりに、兄弟たち、わたしたちのために祈ってください。主の言葉が、あなたがたのところでそうであったように、速やかに宣べ伝えられ、あがめられるように、また、わたしたちが道に外れた悪人どもから逃れられるように、と祈ってください。すべての人に、信仰があるわけではないのです。しかし、主は真実な方です。必ずあなたがたを強め、悪い者から守ってくださいます。（2テサロニケ 3：1～3）

祈願文の知恵による順序

主の祈りの祈願は「①み国が来ますように」「②み心が行われますように」という順番になっていますが、今回はそうしません。「⑦わたしたちを悪からお救いください」という願いが、悪に苦しんでいる人が最初に発する叫びだからです。病や苦しみがすぐに取り除かれるのを望む人々にふさわしい祈りなのです。

主の祈りは、「神に関わる現実」（①み名の聖化・②み国の到来・③み心の成就）から始まり、「わたしたちにより近い現実」（④糧・⑤負い目・⑥誘惑・⑦悪）に進んでいきます。この価値の順序の他にもう一つの順序があります。より教育的で、教えを説くための順序で、今回はこの順序に従います。悪・誘惑・罪・飢えのように、わたしたちがもっとも頻繁に経験する事柄から始めます。悪は、非宗教者からの口からも聞かれます。悪の経験ほど普遍的な経験はないからです。また、「⑦わたしたちを悪からお救いください」という祈願は、直前の「⑥わたしたちが誘惑に負けないようにしてください」に対応しています。2つの祈願の意味がわかると、悪の力が個人にも社会にも潜んでいるかがわかります。

「わたしたちを悪からお救いください」（7番目の祈願）

「悪」を語るとき、わたしたちは、病気・事故・不幸・飢え・貧困・家のない状態・失業を考えます。けれども、実は、これらの悪からの解放は「わたしたちの日ごとの糧を今日もお与えください」（第3章）という表現で望ましいものへの願いとして祈願されています。それと違って、主の祈りの最後の祈願は、悪がもっと深刻で破壊的に呼び起こされています。イエスは、悪の究極的な根である道徳的な悪について語っています。

「悪」 個人的なものと社会を巻き込む集団的な過ちからなります

わたしたちの内に潜む個人的な「悪」は、悩ませ、前進させることを妨げ、悪い方へ連れていきます（悪霊の働きといえるでしょう）。悲観主義・落胆などが、神の国を建設するのを妨害します。「わたしたちを悪からお救いください」という祈願の前の「わたしたちを誘惑に陥らないようにしてください」の祈願があって両者は関係しています。「誘惑」は「悪」に通じています。「誘惑」に陥ると「悪」は良心を引き裂いて平和を奪い人間性を低めます。絶望に至り薬物などに走らせることもあります。私たちが願うのはこれらの「悪」からの解放です。人生に終止符を打ちたいとさえ望ませる「悪」との決別です。

集団的な過ちとは、テロ、人種差別・民族紛争・奴隷制度・社会的不正・拷問・原発問題などのことです。これらの悪から完全に自分を切り離すのは困難です。「悪」は文化の内部に潜んでいて、ある社会的集団の遺伝子になっているからです。

さらにひどい悪・邪悪さが存在します。邪悪な行いが適法になってしまうことがあります。「善と「悪」、
「光」と「闇」が正反対になった状態です。アウシュビッツの強制収容所で犯された巨大な悪を考えてください。ですからイエスは「邪悪さから救ってください」とおん父に叫ぶように祈るのです。わたしたちも
「巨大な悪から救ってください」「悪を正当化する動きから救ってください」と叫ぶのです。

「悪い者」(誘惑する者)

「邪悪さ」とは別に「外的な悪(悪い者)」もあります。イエスは「悪い者」を容赦しませんでした。イエスは悪魔から誘惑を受けましたがきっぱりと退けました。「誘惑する者が来て、イエスに言った。「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。・・・すると、イエスは言われた。「退け、サタン。『あなたの神である主を拝み、／ただ主に仕えよ』／と書いてある。そこで、悪魔は離れ去った。すると、天使たちが来てイエスに仕えた。」(マタイ4:3～11)

ペトロでさえ、イエスにとって「邪悪な者」だったときがありました。「サタンよ、わたしから引き下され」(マルコ8:33) さらに、十字架に付けられたときにも誘惑されますが退けます。「神殿を打ち倒し、三日で建てる者、神の子なら、自分を救ってみろ。そして十字架から降りて来い。・・・「他人は救ったのに、自分は救えない。イスラエルの王だ。今すぐ十字架から降りるがいい。そうすれば、信じてやろう。神に頼っているが、神の御心ならば、今すぐ救ってもらえ。『わたしは神の子だ』と言っていたのだから。」(マタイ27:40～43)

「誘惑」と「悪」がイエスの生涯と死のときでも身近だった事実は、わたしたちにとっても「悪」が身近であることをわからせてくれます。イエスは、弟子たちも「誘惑」「悪」から免れないことを知っていたので、最後の晩餐で「彼らを悪い者から守ってください」(ヨハネ17:15)と祈りました。ペトロのためにも同じでした。「わたしはあなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った」(ルカ22:32)
イエスの祈りで、ペトロは裏切った後、立ち直る力を得ました。

イエスはどのようにしてわたしたちを「悪」「邪悪さ」から救われるでしょう？

福音書の中で、イエスは当時の多くの「身体的な悪」から解放していました。「イエスから力が出て、すべての者をいやしていた」(ルカ6:19) わたしたちが病んでいるとき、よく力を願い求める根拠です。しかし、イエスはもっと底の深い「悪」「道徳的な悪」に対しては別の戦略を取っていました。イエス自身がすべての「悪」を背負う苦痛に満ちた個人的な戦略でした。ご自身が鞭打たれて押しつぶされるのを受け入れました。ご自身を十字架上で捧げ、そこでのゆるしを通して「悪」に打ち勝ちました。「わたしたちを悪からお救いください」という願いには、イエスが捧げてくださった多大な犠牲を伴っています。イエスの限りない愛によって人間の「邪悪さ」が沈められるのです。

「わたしたちを悪からお救いください」という祈願は、深い意味でイエスの死と復活に訴えるものです。

わたしたちはこの世で「悪の衝撃」を感じなくていいように計らわれているのではなく、そのような苦痛

を味わいながらも、この世に来られたイエスによって信仰と希望を確信するように導かれているのです。

もっとも深刻な「悪」は、試みのさなかで負けること、信仰と希望を失うこと、自分に絶望することです。わたしたちが救いを求めるのはこの運命からです。敵の勝利からイエスを守ったように、おん父はわたしたちをも守られます。希望のうちに勝利するように導かれます。この希望をもって「わたしたちを悪からお救いください」とおん父に願うのです。

エクササイズ（祈りを深め定着できるようにエクササイズを繰り返してください）

1. 「わたしたちを悪からお救いください」と繰り返し唱えて、どのような「悪」が思い浮かんできますか？ 個人・社会は、どのような「悪」から解放されるよう祈ったらいいいでしょうか？
2. 「わたしたちを誘惑に陥らせず」と繰り返し唱えようと、どのような「誘惑」を受けていると感じますか？

テキストの質問から

1. 希望の喪失、未来への恐れ。これらの「悪」は、所有物を集め守ることに固執させます。自分を与える気持ちを奪います。信仰よりも年金に信頼を寄せます。正義を回復させるための熱意を奪います。消費主義に浸り娯楽を求めてそれで満足してしまいます。「父よ、わたしたちを恐れからお救いください。不安の悪からお救いください」
2. 一部の人だけの利益、個人的な利益が優先されます。共通善、弱い人の立場を見る目がありません。自分さえよければ、という発想がはびこり、困っている人のことは気遣いません。より高い善のためにリスクをおかすことがありません。「父よ、個人的利益優先の悪からわたしたちをお救いください。弱い人の痛みを感じる心を与えてください。そして熱心に奉仕する心を与えてください。」

第3章. わたしたちに糧をお与えください わたしたちの負い目をお赦してください

4 番目の祈願：「わたしたちの日ごとの糧を今日もお与えください」

5 番目の祈願：「わたしたちの負い目（罪）をお赦しください」

「糧」と「赦し」は、人間にとって大切な2つの基本要素です。「糧」には、食べ物・健康・家庭・仕事・自由が伴っています。「赦し」は、善い関係と和解・心温まる平和を伴っています。

わたしたちの先祖は、荒れ野でマンナを食べました。『天からのパンを彼らに与えて食べさせた』と書いてあるとおりです。」すると、イエスは言われた。「はっきり言うておく。モーセが天からのパンをあなたがたに与えたのではなく、わたしの父が天からのまことのパンをお与えになる。神のパンは、天から降って来て、世に命を与えるものである。」そこで、彼らが、「主よ、そのパンをいつもわたしたちにください」

と言うと、わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。（ヨハネ 6：30～35）

もし人の過ちを赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたの過ちをお赦しになる。しかし、もし人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの過ちをお赦しにならない。」（マタイ 6：14～15）

そのとき、ペトロがイエスのところに来て言った。「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。七回までですか。」イエスは言われた。「あなたに言うておく。七回どころか七の七十倍までも赦しなさい。（マタイ 18：21～22）

「主の祈り」の今回の集いは、刑務所で考察します。ここは、わたしたちの社会を象徴する多くの苦しみが集まっています。苦痛と抑圧と悲しみの場所です。人々を悲劇的で致命的な行いへと突き動かす絶望が見られます。刑務所でも、物質的な糧はある程度満たされていますが、自由と家族的な愛・平和が不足しています。大きな飢えがあります。刑務所は、社会の分裂や衝突が反映されている場所です。和解と更正、回心へと導かれるべき場所です。

「わたしたちの日ごとの糧を今日もお与えください」（4番目の祈願）

イエスが教えてくれた祈願の中心的部分になります。「主の祈り」の7つの祈願の4番目だからです。初めの3つの祈願は、天におられるおん父に直接関係しています。4番目の「糧」に続く3つの祈願は、わたしたちに関係するもので、出発点として「赦し、試練のときの支え、悪からの解放」という人間にとって必要なものを取り上げています。

4番目の祈願で何を望むのでしょうか？

身体的・生物的な命に関わることを願うのは当然です。食べ物・健康・家庭・仕事は日々欠かせないものです。けれども、わたしたちはさらに多くのものを求めます。わたしたちが人間の尊厳を持って生きることです。真理を求め、人生の意味を探究するのです。

「糧（パン）」には2つの意味があります。ヨハネ 6章では、「パン」は荒れ野でヘブライ人のお腹を満たした食べ物と、魂の食べ物、どちらの意味もあります。では、私たちが求める霊的な糧とは何でしょうか？ 信仰と希望という糧です。「わたしたちの日ごとの糧を今日もお与えください」と祈ることで、わたしたちは聖霊の恵みであるイエスご自身をおん父に懇願します。イエスはおん父からの贈り物であり、人生の本当の意味を与えてくださる方です。ミサと聖体拝領、聖櫃の中にイエスはおられます。

霊的な糧を求める人の条件はなんでしょう？

飢えている人。食べ物以外にも、虐げられている人たちも含まれます。糧に不足していない人でも3つの条件に当てはまる人たちも同様です。

第1の条件は、自分が何かを必要としていると認識していることです。自分ひとりの力だけでは十分と思

っていないことです。霊的な糧を求める人は、食卓に糧があってもある意味で貧しさ(能力など)を感じつつ、望みと期待を忘れていない人です。逆に依存的でないことを誇っている人は「金持ち」です。人を支配することに生きがいを感じています。

第2の条件は、自分を気遣ってくれ、愛をもって見守ってくれる父がいることを知っていることです。天におられる父に身を委ねることができることです。わたしの祈りを聴いて、わたしのことを考えてくれる方に向かって、願いを打ち明けられるのです。

第3の条件は、その人が神の国と神のみ心を最優先していることです。「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。」(マタイ 6:33) 人生を神の国に賭ける人は、心の底からこの祈りを唱えます。神に何でも頼めて何でも期待できることを知っています。

「わたしたちの日ごとの糧を今日もお与えください」の祈願は、神の国の優先事項に照らして、今の自分の優先事項を調べることへの招きです。もし、物質的な糧だけを求めていたら、この祈りの本当の願いから離れています。もし、心の中にある願いが真理・正直さ・正義・善さ・友愛ならば、わたしたちの優先順位は適切で祈りは本物です。

「わたしたちの罪(負い目)をお赦してください。わたしたちも(負い目のある)人を赦します」⑤

5番目の祈願では、神との和解を求めています。わたしたち、人間同士が互いに和解することで成り立つ和解でもあります。和解なしでいるとき、地上に平和は訪れません。赦すためには、ある種の度量が必要です。人の赦し方を心得たり、人の赦しを受け入れる心の広さであったり・・・これらの度量を与えてくださいと祈るのです。わたしたちは、「心の平和」と「社会的和解」を願います。この2つは、神からの根本的な祝福(神様に願って与えられるもの)です。その祝福がなければ、糧は古びたもの、消化しにくいものになります。わたしたちは、富を持っても家族の中に平和がなかったり、信頼関係を築けなかったら、富は不毛と孤独のうちに終わります。

5番目の祈願を唱えるのはどのような人でしょう？

すすんで人を赦し、人からの赦しを受取る人です。赦し赦されることがどれほど重要かよくわかっている人です。

「7まででなく7の70倍までも赦すべきだ」(マタイ 18:21~22 参照) 1日が何分あるかを計算するならば「7の70倍まで赦す」というのは「3分ごとに赦すこと」を意味するのに気付きます。ですから、お互いの赦しは毎日の生活そのものになっています。

わたしたちは多くの事柄を、また失望させる多くの人々を赦し合わなければなりません。期待に応えてくれなかったり、困ったときひとりきりにしておいた人々を「赦す」ということです。わたしたちは心に平和を作るために、絶えず「和解」を表現しなければなりません。「赦し」は神からの祝福の本質で、キリスト教特有の賜物です。「赦し」は、それがなくては人間らしい生活が考えられない祝福です。

わたしたちは皆、赦すことが極めて難しく、赦されることはさらに難しいことを知っています。主の祈りの「わたしたちの罪(負い目)をお赦してください。わたしたちも人を赦します」という祈願は、十字架上での「父よ、彼らをお赦してください」(ルカ 23 : 34) というイエスの願いが背景にあります。過酷な苦痛を与えられ、十字架に付けられているにもかかわらず、イエスは赦しの言葉を口にしています。

エクササイズ (祈りを深め定着できるようにエクササイズを繰り返してください)

1. 「わたしたちの日ごとの糧を今日もお与えください」と繰り返して祈るとき、どのような「糧」を願いますか? 自分以外にも、苦しむ・弱い人の必要な「糧」を思い描けますか?
2. 今必要な「赦し」を思い浮かべてみましょう。イエスの十字架上での「赦し」と結び付けられますか? 自分の力に頼らず「イエスの赦し」に与えるように願いましょう。

第4章. みこころが行われますように

「みこころが行われますように」は、主の祈りの3番目の祈願です。イエスは地上での生活で「み心」についてしばしば言及しています。み心を行うことがご自分の食べ物であり、世に来たのは神のみ心を行うためとはっきり語られました。

そして、彼らに言われた。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、わたしと共に目を覚ましていなさい。」少し進んで行って、うつ伏せになり、祈って言われた。「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに。」それから、弟子たちのところへ戻って御覧になると、彼らは眠っていたので、ペトロに言われた。「あなたがたはこのように、わずか一時もわたしと共に目を覚ましていられなかったのか。 誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い。」更に、二度目に向こうへ行って祈られた。「父よ、わたしが飲まないかぎりこの杯が過ぎ去らないのでしたら、あなたの御心が行われますように。」再び戻って御覧になると、弟子たちは眠っていた。ひどく眠ったのである。そこで、彼らを離れ、また向こうへ行って、三度目も同じ言葉で祈られた。(マタイ 26 : 38~44)

わたしが天から降って来たのは、自分の意志を行うためではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行うためである。わたしをお遣わしになった方の御心とは、わたしに与えてくださった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させることである。わたしの父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり、わたしがその人を終わりの日に復活させることだからである。」(ヨハネ 6 : 37~40)

3番目の祈願で何を願うのでしょうか?

3番目の願いは、①「神のみ心」②「行われますように、成就しますように」③「天になされるように地上で」と、言葉ごとに分析する必要があります。

① 神のみ心(神の計画)

宇宙と歴史のための神の包括的な計画、神の素晴らしい計画です。「イエス・キリストによって神の子にしようと、御心のままに前もってお定めになったのです。」(エフェソ 1:5)

秘められた計画をわたしたちに知らせてくださいました。これは、前もってキリストにおいてお決めになった神の御心によるものです。こうして、時が満ちるに及んで、救いの業が完成され、あらゆるものが、頭であるキリストのもとに一つにまとめられます。天にあるものも地にあるものもキリストのもとに一つにまとめられるのです。(エフェソ 1:9~10)

成就されるように願うのは、神のみ心であるこの計画です。けれども、「み心が行われますように」という表現は、大きな計画だけでなく一人ひとりにも及びます。99匹の羊を残して1匹の迷える羊のたとえを語った後「そのように、これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない。」(マタイ 18:14)と述べています。神のみ心は、小さな者たちの救いなのです。

そのとき、イエスはこう言われた。「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。そうです、父よ、これは御心に適うことでした。(マタイ 11:25~26)

父のみ心とは、わたしたちの信仰生活を支える愛そのものです。わたしたちの救いのために神がいつも働かれることで実現していくご計画です。「わたしの父のみ心は、子を見て信じる者が皆、永遠の命を得ることである」(ヨハネ 6:40) それはとても偉大な計画です。

② 「行われますように、成就されますように」

解釈者たちは「み心は誰によって行われるのだろうか？」と問います。福音書には、両方の用法があります。第1に「み心」は、神によって行われなければなりません。何といっても救いの計画を成就するのは神なのでから。この祈願を促すのは神です。しかしながら、わたしたちもまた、神のみ心を日々実現しています。み心は、わたしたちの課題です。「行われますように、成就されますように」の祈りは、おん父が望むことを成し遂げられるよう、わたしたちを助けてください、と願う祈りです。

「わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者が皆、天の国に入るわけではない。わたしの天の父の御心を行う者だけが入るのである。(マタイ 7:21)

「だれでも、わたしの天の父の御心を行う人が、わたしの兄弟、姉妹、また母である。」(マタイ 12:50) とても力強い、慰めを与える美しい言葉です。

③ 天になされるように地上で

天とは、大地の上の空間のことではなく、神が諸天使と諸聖人にご自身を完全に啓示されている「場」のことです。神のみ心は、天上では何にも妨害されず、完璧に実現されます。天上のエルサレム、栄光のキリ

ストがおられる「場」です。

元のギリシア語を忠実に訳すと、普段のわたしたちの理解とは違った響きが浮かび上がります。神のみ心が天で行われているのとまったく同じ仕方で地上に行われるように、と考えるのは行き過ぎがあるということです。むしろ、天で起こっていることをわたしたちが見習うべきことを示すために「天でなされるように、地上でもなされるように」と理解するのが正しいでしょう。わたしたちは、天で行われるように地上で努力しますが、救いの計画が完全に成就されるのは世の終わりです。あるべき状態にとらわれるのではなく、日々できることを成し遂げていく感覚が大切です。理想的な言葉を並べるより、実現のために一步一步地道な努力を重ねることが大切です。

また「天でなされるように地上でもなされるように」という比較の表現は、主の祈りの最初の3つすべての祈願への導入でもあります。

天でなされるように地上でも み名が尊まれますように。(1番目の祈願)

天でなされるように地上でも み国が来ますように。(2番目の祈願)

天でなされるように地上でも あなたの偉大な救いの計画が行われますように。(3番目の祈願)

イエスは、主の祈りによって神が完全にご自身を啓示しておられる場(天)をよく見つめるように招いています。わたしたちの信仰の旅は、暗闇のなかをあてもなくさ迷うことはありません。この旅は、神の計画による目的地があります。イエスはわたしたちにそれを理解させます。天で実現なさせて、地上でもわたしたちによって成就するように導いています。天が地に到来し始めています。

誰がこの祈願を唱えられるでしょう？

① イエスが祈ることができます

イエスは、その生と死において、いつも父のみ心について考えています。

わたしが天から降って来たのは、自分の意志を行うためではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行うためである。(ヨハネ6:38) イエスだけが完全にこの願いを祈ることができます。

死の恐れを前にしても気高くこの祈りを繰り返しています。「少し進んで行って、うつ伏せになり、祈って言われた。「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに。」(マタイ26:39) 更に、二度目に向こうへ行って祈られた。「父よ、わたしが飲まないかぎりこの杯が過ぎ去らないのでしたら、あなたの御心が行われますように。」(26:42)

② すべての信仰者が祈ることができます

イエスの口から借りることで、困難なときすべての信仰者がこの祈りを唱えられます。使徒書を見てみま

しょう。パウロがエルサレムに上っていくところですが、投獄が予想されます。仲間は彼を行かせまいとしますが、パウロはこう応えます。

「そのとき、パウロは答えた。「泣いたり、わたしの心をくじいたり、いったいこれはどういうことですか。主イエスの名のためならば、エルサレムで縛られることばかりか死ぬことさえも、わたしは覚悟しているのです。」パウロがわたしたちの勧めを聞き入れようとしないので、わたしたちは、「主の御心が行われますように」と言って、口をつぐんだ。（使徒書 21：13～14）「御心が行われますように」の祈りは、人生の困難にあつて何度も繰り返されてきた祈りです。激しい痛み・不安を和らげ、多くの心を慰めてきた祈りです。

使徒ペトロも迫害の苦しみに耐えるようにこう勧めています。「神の御心によるのであれば、善を行って苦しむ方が、悪を行って苦しむよりはよい。」（1ペトロ 3：7）「だから、神の御心によって苦しみを受ける人は、善い行いをし続けて、真実であられる創造主に自分の魂をゆだねなさい。」（4：19）

この祈りは、試練・魂の暗夜・苦悶のときに特に大切です。なぜなら、祈りは平和をもたらし、苦しい状況のうちに神の計画を読み取らせてくれるからです。その平和は、神のみ心に自らを明け渡し、委ねることでの平和です。

ミサでは、主の祈りに続いて司祭は「教会に平和を願う祈り」を唱えます。教会だけでなく、一人ひとりの心にもこの平和を願っています

主イエス・キリスト、あなたは使徒に仰せになりました。「わたしは平和をあなたがたに残し、わたしの平和をあなたがたに与える。わたしたちの罪ではなく教会の信仰を顧み、おことばの通り教会に平和と一致をお与えください。

③ 苦しむ人が祈ることができます

「み心が天でなされるように地上でも行われますように」は、この世で未だみ心が成就されていない苦しむ人の祈願でもあります。不正と残酷さ、搾取によって苦しむ人たちの祈りです。傷つきやすい人、貧しい人、正義に飢え渴く人の祈りです。

④ 喜んでいる信仰者が唱えることができます

パウロは、コロサイの手紙を喜びの賛歌で始めています。「神は、御心のままに、満ちあふれるものを余すところなく御子の内に宿らせ、その十字架の血によって平和を打ち立て、地にあるものであれ、天にあるものであれ、万物をただ御子によって、御自分と和解させられました。」（コロサイ 1：19～20）

使徒は、神のみ心の成就をうれしく思い、み心が行われているのを大いに喜んでいます。わたしたちも

「み心が行われますように」と喜んで唱えておん父を賛美できます。他の人の幸せも喜べるよう願う祈りです。

エクササイズ （祈りを深め定着できるようにエクササイズを繰り返してください）

1. あなたがいつも大切にしているみ心(神様の計画)は何でしょうか？ また、何が神のみ心が実現するのを邪魔しているのでしょうか？
2. あなたは神のみ心に喜びを感じていますか？ ある聖人は「神のみ心はわたしにとってこの上ない喜び」と言いました。あなたにとっても同じですか？
3. 特に若者への問いとして。わたしは自分の将来を計画するとき、神のみ心を求めていますか？ み心である神の召し出しを自分の人生で聴いていますか？

第5章. み国が来ますように（2番目の祈願）

「そのときから、イエスは、「悔い改めよ。天の国は近づいた」と言って、宣べ伝え始められた。」（マタイ 4: 17）

「だから、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思い悩むな。それはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。」（マタイ 6: 31～34）

「わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者が皆、天の国に入るわけではない。わたしの天の父の御心を行う者だけが入るのである。」（マタイ 7: 21）

「み国が来ますように」

「み国が来ますように」は主の祈りの中心的な祈願です。この祈りは、いくら研究しても、わたしの言葉を越えていく何かがあり、わたしからすると逃げてしまいます。理解するには、イエスの考えと思いに入り込む必要があります。

「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。その火が既に燃えていたらと、どんなに願っていることか。」（ルカ 12: 49）イエスが地上に投じることを望んだあの火は何だったのでしょうか？ イエスの望みをわたしたちの望みにする必要があります。

「み国が来ますように」は、イエスを突き動かしていた望みをまとめた祈りです。彼が自分のなかで燃やしていた火です。共観福音書のなかで「み国」はイエスの口から少なくとも 90 回ものぼっています。このことからイエスが「み国」にどれほど憧れていたかがわかります。

- ・何よりもまずみ国を求める人たちが、希望を持って日ごとの糧を待つことで成就します。

- ・おん父の赦しを学び、人を赦すことで成就します。
- ・自暴自棄に陥る誘惑にさらされても、おん父が支えてくださる確信によって成就します。
- ・悪、あるいは悪者から解放されて成就します。

すべての祈願が、み国の成就とつながっています。

「み国が来ますように」の祈願でわたしたちは何を願っているのでしょうか？

「み国」と訳しているギリシア語のバシレイアにはさまざまな意味があります。

「王位」と訳されると父なる神が世界に対して主権を有することを意味します。その地位は、創造の初めからつねに、神に属している地位です。その意味では、み国は到来しません。初めからすでにあるのです。

「王国」と訳すこともできます。神が王権を行使する具体的な領土、場所・空間を意味します。この意味で、み国は天にあって地上に到来するだろう、というのです。その最終段階は、神の支配が全宇宙において完全になされるときです。

「統治」と訳すこともできます。おん父が世界を目に見える方法で掌握している状態です。その活動は、イエスの受肉、受難、死、復活、そして主が天に戻られる（再臨）まで教会の歴史のなかに続きます。そのとき、主の働きは、展開を遂げて完全に目に見えるものになるでしょう。

神のみ国はどのように、どこに到来するのでしょうか？

神のみ国は、神がご自身をあらわすあらゆる行為のなかで到来します。

み国はイエスの生涯のうちに力強く到来し始めました。「悔い改めよ。神の国は近づいた。」（マタイ 4：17）がイエスの宣教の第一声でした。

生涯の間、イエスは「しかし、わたしが神の霊で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたたちのところに来ているのだ。」（12：28）イエスのいやしのわざにおいて到来しました。

「ファリサイ派の人々が、神の国はいつ来るのかと尋ねたので、イエスは答えて言われた。「神の国は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ。」（ルカ 17：20～21）と答えました。

イエスと共に到来するみ国は、

- ① イエスに従う人たちの行い、聖霊に促された教会の行いを通して到来します。
- ② み国は祈りと聖体祭儀のうちに、今も黙想のうちに到来します。

③ へりくだって病、苦しみを受容するときにもやってきます。

④ 心から喜びを分かちときにもやってきます。

たとえ時の終わりの完全な形ではないとしても、この瞬間に到来しています。

み国は、イエスの生涯での献身・謙遜な奉仕に現れたように、全ての人間の活動領域で到来します。

「み国が来ますように」という祈願で、歴史のどんでん返しを要求してはなりません。神の国が、いきなりおとずれて、現在の状況をひっくり返すのを期待すべきではありません。物事は相変わらずそのままかもしれませんが、わたしたちの見方が変わります。内面の変化が大切です。

誰が「み国が来ますように」と忠実に祈るのでしょうか？

「み国が来ますように」と祈れる人は、運命のどんでん返しを要求したり、やみくもな期待はいたしません。み国のために忠実に祈れる人は、

① イエスの弟子になった人です。

② 謙遜で貧しい方法を使える人です。

③ 虐げられていても、イエスが神の子であることがわかる人です。

イエスの弟子になった人は、日々の思い悩みにとらわれることがなくなります。

「だから、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思い悩むな。それはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。」(マタイ 6:31~33)

イエスの弟子になった人は、あらゆる思い悩みを父に委ねることを知っています。その人は、神が愛にあふれた父であることを知っているからです。おん父は、必要なものを与え、ご自身の子どものように愛し、み国の実現を望んでおられるのです。

神のみ国は、わたしたちにおける聖霊の働きの実りです。わたしたちは、聖霊を信頼し、父のみ心を行います。

キリスト者は聖霊に基づく識別をしながら、神の国の成長と、関わりを持つ文化や社会の進歩を区別すべきです。この区別は分離ではありません。この世における正義と平和とに役立つために、創造主からいただいた力や手段を正しく用いなければなりません。(『カトリック教会のカテキズム』n. 2820 一部表現を変えました)

み国の到来のために働く人は、口先だけでなく、実際に人間の進歩、文化、平和のために働きます。「み

国が来ますように」の祈願は、生活や仕事での目標が実現するようにわたしたちを霊的に養っています。

エクササイズ（祈りを深め定着できるようにエクササイズを繰り返してください）

これらの問いは、まず沈黙で、次に互いの会話のうちで答えを見出してみてください。

1. 「神の国」と言う表現はどんな気持ちを引き起こしますか？
2. 今の生活で、どこに「神の国」が実現しているでしょうか？
2. 「み国」を優先させても、神様は私のことを計らってくださる、という信頼がありますか？
3. 「み国」が実現するように、聖霊が助けてくれる実感がありますか？